

「想像力のスイッチを入れよう」
(五年)



ジャーナリスト
しもむらけんいち
下村健一

想像力のスイーツを入れよう

下村 健一 氏

学校のマラソン大会、あなたが十位に入らないうえ、あなたの、前回のマラソン大会での結果は、五位だったとする。ではあなたが、この選手だとして、前回のマラソン大会より、五位も下がりました。しかし、先生は「さうでもない」といふ。でも、五秒も六秒もがなまなまっています。これは、同じ山でも、河を渡る時と比べて、走っている内容がずいぶんちがってくる。これは、学校の成績での金銀銅の区別することはない。わたしたちは、それとちが



「人気があるサッカーチームの新しい監督として、Aさんに注目が集まっている」という状況を設定し、メディアの特性や、情報を受け取る側の姿勢——「想像力のスイッチ」を入れることについて説明した文章。その想像の観点を、『事実かな、印象かな。』『他の見方もないかな。』『何がかくれているかな。』『まだ分からないよね。』という四つのキーワードとして示し、子どもたちに分かりやすい例を挙げながら説明を展開し、自らの考えを伝えている。

情報に振り回されない
ための、四つのハテナ

右のタイトルは、メデイアリテラシーについて講演をする際に私がいつも掲げている演題です。

①事実かな、印象かな？ ②他の見方もないかな？ ③何が隠れているかな？ ④まだ分からないよね？ —— インターネットやテレビや新聞から情報を取り込むとき、独り言のようにこの四つのハテナをつぶやさながら受け止めよう。そうすれば、もう簡単には踊らされなくなるよ、という「おまじない」のような話です。中学校の出張授業から経営者団体での講話まで、幅広い層の皆さんに、実際のニュースに当てはめながらお話ししています。

特に子どもたちの場合、家でテレビのニュース・情報番組と一緒に見ながら、横で親御さんがこの四つをただクイズのよう

につぶやいているだけで、とりあえず鵜呑みの免れることが出来るという速攻性があるようです。聴講後に、時々そんな我が家の実施報告をいただきます。

今回は、それを初めて小学生向けに、リメイクしてみました。本文中、『』で括った四つの言葉が、まさにこの「四つのハテナ」に該当します。「情報」というものを黒板消しに置き換えて①③を喩えるならば、「事実には、印象という粉がよく付着している。この粉をちゃんとふき取って、黒板消し本体を見ようね」というのが、①の話。「長辺の方から見るか、短辺の方から見るか、あるいは斜めから見るか。見方によって、目に映る黒板消しの姿も変わるよね」というのが、②の話。「黒板消しについてはよく見えた。でも、チョークとか定規とか、他の物の存在を忘れてないかな」というのが、③の話です。

子どもたちからは、「②と③はどう違うの？」という質問が出るかもしれません。両者の違いは、明確です。②は、現にスポットライトの中に置かれている情報について、

見つめ直す作業。③は、そこから目を転じて、周囲の暗がりを取り起す作業です。

——私がこうしたメディアリテラシー教育にこだわるようになった直接のきっかけは、一九九四年に起きた松本サリン事件でした。後にカルト団体の犯行と確定しますが、当初は第一通報者の会社員K氏が犯人扱いの報道をされ、それに乗った全国の人たちから、義憤に駆られた手紙や無言電話が、そのK氏の自宅に殺到しました。「早く白状しろ」「人でなし」といった言葉を浴びせられ、重症の被害者でありながら社会生活にも深刻な影響を受ける二次被害に見舞われました。そのとき、警察情報を鵜呑みにした多くの善良な国民が、K氏にとって「加害者」になってしまったのです。

誰も真犯人を知らなかったんだから仕方ないよ、という話ではありません。③の思考態度さえあれば、「犯人はKだな」という即断ではなく、「犯人はKか、まだ見えないXだな」という保留が誰でも出来たのです。

こうしたことは、程度の差こそあれ、その後も続発しています。ライン、フェイスブック、ツイッターといった情報発信機能が当時より格段に発達している今、いつ、あなたの教え子が加害者の列に加わるか、分かりません。「四つのハテナ」の習得は、情報洪水の被害者にならないための自衛であると同時に、加害者にならないための責任でもあるのです。

冒頭の方で、この「四つのハテナ」は一回で効く即効薬だと申しました。そういう売り文句は少々胡散臭い感じがしますが（笑）、実はこれ、連続使用していると、じわじわ体質改善が図れる漢方薬でもあります。この単元が終わってから、子どもたちの情報摂取の機会に終わりはありません。ぜひ折に触れ、実際のニュースを教材に、「ちょっとここで、想像力のスイッチをオンにしてみようか」と、思い出させてあげて下さい。社会科学で学ぶ《知識》と、国語科で学ぶこの《眼力》によって、子どもたちが情報化社会をしつかり歩いてゆくことを、筆者として願ってやみません。

しもむら・けんいち

一九六〇年、東京で生まれ、ジャーナリスト、キャスターなど。東京大学卒業後、TBSに入社。現場取材リポーター、キャスターとして活躍。一九九九年TBS退社後は、市民メディアアドバイザーとしても活動。著書に「マスコミは何を伝えないか」(岩波書店)など。